美味しい「てんこもり」の移植栽培基準例（JAくろべ版）

600kg穫り収量構成の目安

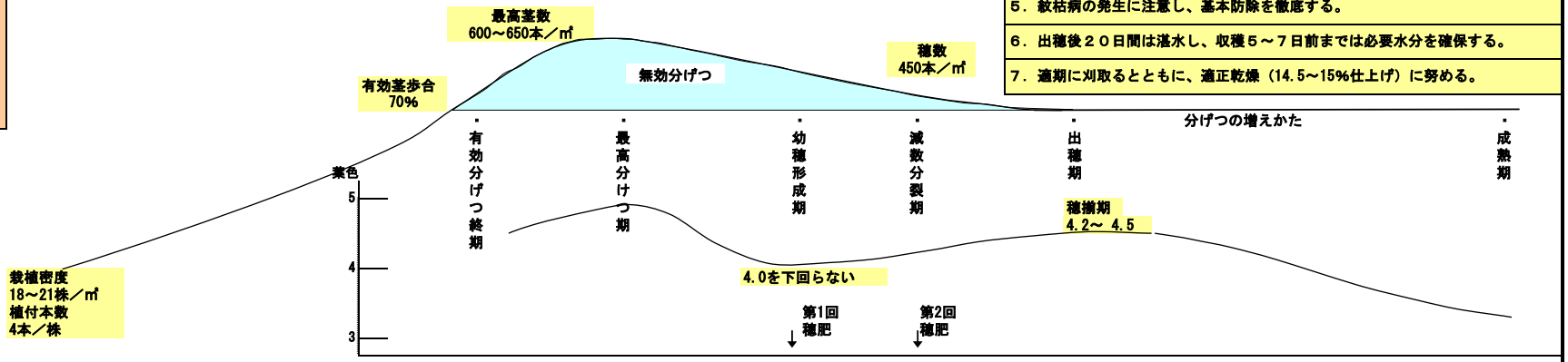
収量構成	目安
㎡当たり最高茎数（本）	600～650
有効茎歩合（%）	70
㎡当たり穂数（本）	450
平均一穂籾数（粒）	70
㎡当たり籾数（百粒）	300～320
登熟歩合（%）	85
玄米千粒重（g）	22.5

土壌区分別施肥設計（kg／10ａ）

土壌区分		窒素施用量 基肥等 側条施肥体系	窒素施用量 穂肥 出穂25日前	窒素施用量 穂肥 出穂15日前	三要素合計 窒素	三要素合計 リン酸	三要素合計 加里
沖積	ＣＬ	3.0 ～ 4.0	1.5	1.5	6.0～7.0	7.0～8.0	10.0～12.0
	Ｌ	3.5 ～ 4.5	1.5	1.8	6.8～7.8		
	ＳＬ	4.0 ～ 5.0	1.5 ～ 2.0	2.0	7.5～9.0		
洪積	Ｌ～ＣＬ	3.0 ～ 5.0	1.5	1.8	6.3～8.3		

栽培のポイント

1. １箱当たり１２０ｇ以下のうす播きを徹底し、良い苗を作る。
2. 施肥量は、土質や土性に応じて過剰とならないよう留意する。
3. 無効分げつが発生しやすいので、中干しを徹底し過剰分げつを防ぐ。
4. 出穂30日前から入水し幼穂形成期の葉色が4.0を下回らないよう誘導する。
5. 紋枯病の発生に注意し、基本防除を徹底する。
6. 出穂後２０日間は湛水し、収穫５～７日前までは必要水分を確保する。
7. 適期に刈取るとともに、適正乾燥（14.5～15%仕上げ）に努める。



月日	4月	5月	6月	7月	8月	9月
	4/15	5/8	6/1 6/8 6/12	7/12	8/4	9/19

生育期区分：育苗期 ／ 田植期 ／ 活着期 ／ 有効分げつ期 ／ 無効分げつ期 ／ 幼穂形成期～穂ばらみ期 ／ 登熟期

水管理：やや深水 ／ 浅水管理 ／ 中干し ／ 間断かん水 ／ 出穂30日前からの入水（ヒタヒタ水） ／ 出穂から20日間は湛水管理 ／ 間断かん水（落水を急がないように）

栽培管理のポイント

- 育苗期
  - ・葉いもち予防のため苗箱施薬を行う。
  - ・育苗ハウスが二十五度以下になるよう管理する。
  - ●**一箱当たり一二〇ｇ以下とする。播種は田植えの二十日前に行い、播種量は**
  - ・十分に浸種して芽出しを確実に行う。
  - ・田面の均平を図る。
  - ●**ゆっくりと耕起し、作土十五cm以上を確保する。**
- 田植期
  - ●**株数は坪当たり七十株を植え、良質の茎を早く確保する。**
  - ●**基肥量は地区基準量を守る。**
  - ・一株の植付け本数は四本とし、三cm程度の深さに植える。
- 活着期
  - ・活着後は浅水管理として分げつの発生を促す。
  - ・田植後はやや深水として活着を早める。
- 有効分げつ期
  - ●**確保した上で、田植後一か月までに溝掘りを行う。六月一半旬を目安に入水を止め、適度な土壌硬度を**
- 無効分げつ期
  - ●**田植後一か月までに中干しを確実に開始し、根の活力を高めるとともに、過剰分げつを抑制する。**
- 幼穂形成期～穂ばらみ期
  - ●**出穂三十日前からの入水（ヒタヒタ水）により、葉色低下を防ぐ。**
  - ●**幼穂形成期の葉色は四・〇～四・五に誘導する（四・〇を下回らない）。**
  - ・土壌条件に応じ、適正量を施用する。
  - ・穂肥の多量施用は玄米蛋白含有率を高めるので
  - ・穂肥は出穂二十五日前から二回施用する。
  - ●**紋枯病は穂ばらみ期に確実に防除する。**
  - ・カメムシ類は穂揃期防除を中心に確実に行う。
  - ・穂いもちは穂揃期に防除をする。
- 登熟期
  - ●**出穂から二十日間は湛水状態を保つ。**
  - ・フェーン時はかん水して、乾燥害を防ぐ。
  - ・刈取り予定日の五～七日前までかん水する。
  - ●**籾の黄化率八十五～九〇%程度で適期に刈取る。**
  - ・適正な乾燥速度と仕上水分十四・五～十五・〇%を厳守し、胴割米や過乾燥米の発生を防止する。
  - ・一・九ミリのふるいで選別する。